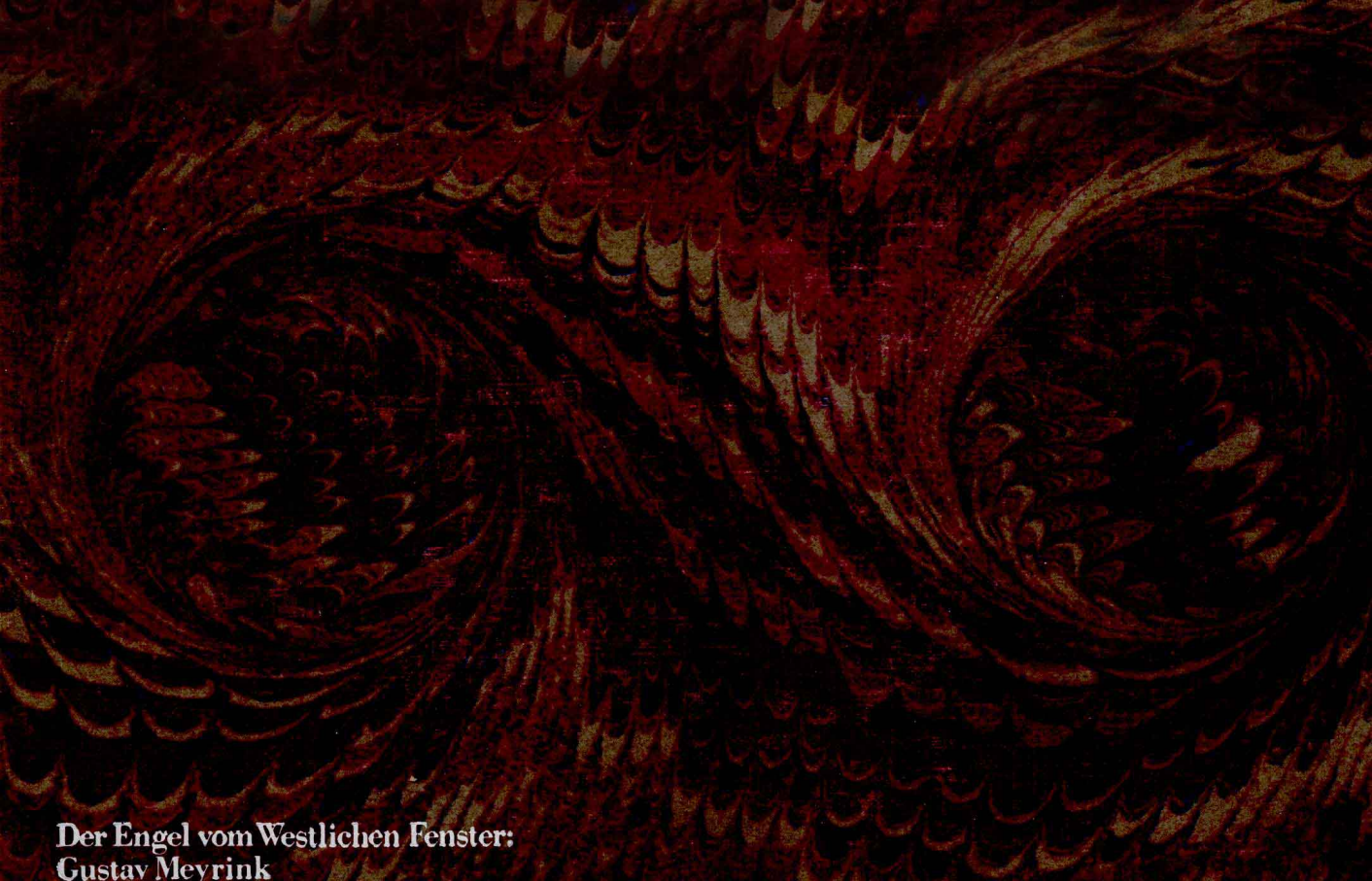

Der Engel vom Westlichen Fenster:
Gustav Meyrink

紀田順一郎 荒俣宏 編・三浦雅士 監修

世界幻想文学大系 38 A

国書刊行会

世界幻想文学大系……責任編集＝紀田順一郎＋荒俣宏
第三十八巻A

西の窓の天使――上

昭和六〇年六月五日印刷　昭和六〇年六月一〇日初版第一刷発行
著者――グスタフ・マイリンク
訳者――佐藤恵三＋竹内節
発行者――佐藤今朝夫
発行所――株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨三―五―一八　郵便番号一七〇　電話〇三―九一七―八二八七　振替東京五―六五二〇九
造本者――杉浦康平＋鈴木一誌　協力＝佐藤篤司
挿画――渡辺富士雄
印刷所――凸版印刷株式会社＋セイユウ写真印刷株式会社
製本所――凸版印刷株式会社
定価――三、〇〇〇円
●落丁本・乱丁本はおとりかえします

佐藤恵三さとうけいぞう
一九三五年、弘前市生れ。
京都大学大学院修士課程修了。
現在、京都産業大学教授。
専攻、ドイツ文学。
主要訳書――
エーヴェルス『蜘蛛・ミイラの花嫁他』
（共訳）創土社、一九七三年。
マイリンク『緑の顔』
創土社、一九七四年。
エーヴェルス『魔法使いの弟子』
創土社、一九七九年。

竹内節たけうちみさお
一九四七年、長野県生れ。
大阪市立大学大学院修士課程修了。
現在、姫路工業大学助教授。
専攻、ドイツ文学。
主要訳書――
トーマス・ベルンハルト『石灰工場』
早川書房、一九八一年。

世界幻想文学大系——第三十八巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

西の窓の天使——上

G・マイリンク——佐藤恵三＋竹内節＝訳

目次

7――西の窓の天使――上
341――イギリス略図・テムズ川沿岸略図

西の窓の天使——上

なんとも妙な感じだな、しっかり紐でくくり、封印までしてある故人の持ち物を手にするのは。——蜘蛛の糸のような、目に見えない細い糸がそこから伸びていて、黄泉の国への道案内をしているような気がする。青い紙で入念に包装され、その上に幾重にも細引がかけてある。こんなところを見ていると、死期の迫ったのを感じた人間が、よくよく考えた末にしたことなのだ、と暗々裡に伝わってくる。かつては大きな影響力を持っていたが、もうあの世にいってしまった人物の手で書き残されたもので、もうとっくに時の流れにかすんでしまった話が一杯つまっている手紙やノート、小物入れなのだろう。死期が迫ったために、将来相続することになる人間、ほとんど面識もない遠縁の人間——つまり私——に遺そうと、漠然と考えながら蒐集し、整理して包みにしたわけだ。後世に遺したい一心できちんと封をしたこの包みが、誰かの手になんとか渡されることになれば、自分が死んだことや、自分がどういう人間だったか、わかってくれるとでも思ったのだろう。

包みの封印に使われているのは分厚い赤い封蠟で、私の従兄、ジョン・ロジャーのものだということがわかるし、それには私の母と母方の家系の紋章がはいっている。ずいぶん長い間、母の甥に当るこの男は、従姉妹や叔母たちの間で「彼の家系の最後の男」だなどと言われていたものだ。私など、その言葉を聞かされるたびに、この従兄の名前はただでさえ異国風なのに、いかにも厳めしい称号が隠されているのだぞ、といわんばかりに聞こえたものだ。従姉妹や叔母たちが妙に気どって、いささか滑稽なほど鼻にかけ、ひからびた唇を乙にすぼめて言うものだから、よけいそんな感じがした。なにしろ、衰退の一途をたどっている家系が生命の余力を必死でふりしぼっているというのに、力を貸すとはとても思えない人たちだったからだ。

この家系の系統樹は——こうした紋章学の用語のイメージが、あれこれ穿鑿している私の頭のなかでどんど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んふくらんでくる――妙に瘤々した枝を遠い国々まで伸ばした。その根はスコットランドから出て、イギリス各地に花を咲かせ、ウェールズでも最古を誇るさる一族と血縁関係にあったという。スウェーデン、アメリカ、さらにシュタイヤーマルク*1とドイツに根をおろした一族の若枝は、勢いよく伸びた。小枝の部分が至るところで枯れ、大英帝国では幹が枯れてしまった。ただわが国の、ここオーストリア南部だけは、最後の枝が果実を実らせたのだ。従兄のジョン・ロジャーのことだ。この最後の枝であるロジャーの息の根を――イギリスが止めてしまったのだ！

私の母方の祖父、「閣下」は、先祖代々受けつがれてきた格式や名前にどれほどこだわったことだろう！ シュタイヤーマルクでは、酪農家にすぎなかった祖父がだ！――従兄のジョン・ロジャーは、ほかの道を選んだ。自然科学を学んで医者を生業とする傍ら、現代の精神病理学にも興味を持ち、ウィーンやチューリッヒ、アレッポ*2やマドラス*3、アレクサンドリア*4やトリノなど、広く世間を渡り歩いて、実に辛抱強く研鑽を重ねた。行く先々で教えを仰いだ先生というのは、学位のある人もいれば、全然ない人もいて、東洋風に垢まみれのままかと思えば、西洋風に糊とアイロンのきいたシャツを着こんだりといった違いはあっても、人間の深層心理に通じている点では、いずれも錚々たる人たちだった。

大戦が勃発する数年前、ジョン・ロジャーはイギリスに渡った。そこで古いわが一族の故事来歴を調べることに没頭したという。なぜなのかはわからないのだが、ロジャーはそこに秘められている奇妙な謎を嗅ぎつ

*1―オーストリア南部の州。
*2―北シリアの地名で、現在はハレブ。
*3―インドのベンガル湾沿いの都市。
*4―この名の地名はたくさんあって特定できないが、エジプトのものだろう。

けたのだ、といつも噂になっていた。そうしているうちに思いがけず戦争のあおりをくったのだ。オーストリア軍の予備将校だったものだから、ロジャーは抑留された。五年後、収容所を出たときには、性格破産も同然で、海峡を越えて帰国することもなく、ロンドンのどこかで野垂れ死んだわけだ。あとに遺したものといえば、わずかばかりの手まわり品だけで、今では方々の家族の間に分散してしまっている。

私に遺されたのは、ほんの二、三の形見の品と今日届いたこの小包だ。上下のそりの激しい字で私の宛名が明記してある。

これで問題の系統樹が絶え、名だたる紋章も形なしになってしまったわけか！

そう考えるのはつまらぬ感傷にすぎない。いかな紋章官といえども、当の本人が死んだばかりなのに、すぐ陰気で格式ばった仕事を行うはずがないのだから。

紋章も形なしになってしまったんだな——と、その赤い封印を切ったとき、私はなんとなく低く呟いてしまった。こんな印形を使って封印する者は、もういないだろう。

雄渾で立派な紋章だ。その封印をこうして——破る。破るだって？　妙だな。こう書くと、なにか嘘になりそうな気が急にしてこないだろうか。

紋章を破りあけたのは確かだが、ひょっとして、長く眠っていたところを起こしただけということなのかもしれんぞ！——上部が四、三に分けられて脚部となるあたりにギザギザの線がはいった楯型で、上部の右の青い地には銀の剣が垂直に緑の丘につき刺さっている——ウスターにあるわれわれの祖先の所有地、グラッドヒルに因んだものだ。左の銀の地には青々と茂った木が立っていて、その根の間から銀の泉が湧いている——これはミドルセクスのモートレイク・1に因んでいる。脚部のギザギザ線の地に火を灯したランプが描

かれている。形からすると、初期のキリスト教時代のもののようだ。風変りな図柄で、昔から紋章学者たちのもの珍しげな目が注がれてきたものだ。

実にきれいに押してある封印も、これが最後だと思うと、破りあけるのはためらうなあ。じっと見ているほうが愉しい！——おや、これはなんだ?! 楯の脚部に描かれているのは、火を灯した吊りランプなんかじゃないぞ！ これは水晶じゃないか！ ちゃんとした正十二面体になっていて、後光のような光を発していないだろうか？ それじゃ、きらきら輝く柘榴石なんだな、どう見たって、薄ぼんやり灯った石油ランプなんかじゃない！ またなんとなく妙な感じがしてきた。そういえば——何年も前から、いや何百年も前からと言うべきか、それまで眠っていた気持が、むくむくと頭をもたげてきて、意識しろと迫っているようだ。どうして柘榴石なんか、紋章にはいっているんだろう。——あれっ、こりゃまた細かい字の銘じゃないか。拡大鏡をとって読んでみる。「神聖かつ霊験あらたかなる石」

日頃からよく知っていた昔の紋章に、どうしてこんな手を加えたんだろう、と見ていて首をひねってしまう。まったく見たこともない篆刻（てんこく）だが！——従兄のジョン・ロジャーは、ほかにもうひとつ予備の印章を持っていたのだろうか。それとも——そうか、わかったぞ、この彫りこみの切れといい、モダンなところといい、間違いない。ロジャーがロンドンで新しいのをつくらせたんだ。それにしてもどうしてだろう。——石油ランプだと思ったなんて！ 当り前すぎて滑稽と言ってもいいとさえ、にわかに思われてくる。石油ランプなんて、後世の低劣な俗悪趣味でしかなかったんだからな！ 昔から紋章に使うのは、きらきら輝く水晶

*1—ロンドンからテムズ川を溯上した河畔にある、サレー州の一行政教区。ミドルセクスとあるのは作者の誤記か。

と相場が決まっていたんだ！――でも、こんな銘がついているなんてどういうことなんだろう。――奇妙だな、この水晶のことは前から知っていて、――なんとなく心に親しみを覚えるような気がするなんて。水晶が！　なにかの天辺に当るところで、光を発してきらきら輝く柘榴石のメールヘンがあるのは知っている――だが、どんな話だったか忘れてしまった。

ためらいながら最後の封印をこじあけ、小包の紐をほどく。目の前に現われたのは、古びた手紙や書類、文書、抜き書き、薔薇十字団の暗号が書かれている黄ばんだ羊皮紙、日記、ところどころ黴の生えかけた、錬金術に用いる五線星形（パンタクル）*1、古い銅版画がはいった二、三冊の豚革綴じの本、それにいろいろな仮綴じ本だ。それから象牙の小函が二、三個出てきた。妙なガラクタが一杯つまっていて、硬貨とか、さも遺品として大事にしてくれ、とでもいうように銀箔や金箔で縁どった木片とか、骨細工などである。それから、艶光りしているばかりか、表面が水晶のように鋭い切り子にしてあり、これぞデヴンシァ産の良質の石炭でございといった見本が出てきた。そのほか、いろいろそういった類いのものがはいっている。――――いちばん上にのっていたのは、上下のそりの激しい、ジョン・ロジャー独特のこわばった筆蹟で書かれた紙切れだ。

「読め、さもなくば読むな！　焼却するか保管するか、どちらかにせよ！　朽ちゆくものは朽ちゆくがいい。ウェールズの領主、ホウエル・ダット*2の血をひくわれわれは、死んだのだ。――――マスキー」

これが、私に読ませようと書いた文章だろうか――と頭をひねる。どうしてもそうとしかとれないな！　文章の意味がわからないが、いちいち穿鑿する気は起こらない。どうして今わからなきゃいけないのさ！　あ

とになればきっとひとりでにわかるってば！　と、子供が自分に言い聞かせているような気持だ。それにしてもこの「マスキー」*3という言葉は、どういう意味なんだろう。どうしても知りたくなる。百科事典をひいてみよう。「マスキー＝英語的な中国語の表現」――と事典にはある。――大したことではない！　というほどの意味で、ロシア語の「なんでもない（ニチエヴォー）」と同義だ。

*1―所謂「五芒星形」と訳されるペンタグラムの別称にも用いられるが、魔術の儀式で首にかけたり、胸にはりつけたりした特定の幾何図形の呼称でもあり、いずれも魔除けに用いられる点では似ている。ただし、ピタゴラスのパンタケルと称するものは、六角星形で、頂点に鷲、人頭の下に牛と獅子が配されているという。

*2―南ウェールズを世襲的に統治した領主ロードリ・モール家に連なる一人で、善良王の異名のあるホウエル・ダット（又はヒュエル・ドッタ？）は、後文に出るロデリック大王の孫（？―九五〇）である。

*3―『ホブスン・ジョブスン―口語上のアングロ・インディアンの用語、成句、及びその他アジア地域言語の英語化用語の語彙集』（一九〇三）にも似た説明があり、恐らくマカオから直輸入されたポルトガル語のマス・ク（しかし、それにもかかわらずの意）が起源だろう、とも付記があるだけで、推量の域を出ない。作中ではむしろある人の呼称となっている。

＊　＊　＊

従兄のジョン・ロジャーの身になにが起こったのだろう、希望やそういった類いのものもなんとはかないものだろう、と長いこと思いめぐらしてから、遺品を詳しく調べるのは明日にしようと、昨日机を離れたのは、夜も大分ふけてからのことだった。床にはいってすぐ眠った。

紋章の図柄にあった水晶のことが、眠ってからも私の頭を離れなかったらしい。とにかく、あの夜の夢ほど奇妙な夢は見たことがない。

夢に出てきた柘榴石は頭上高く、暗闇のなかに浮かんでいたのだ。その石の発する蒼白い光が私の額に当り、頭と柘榴石の間になにか深いつながりができあがっているらしい、とはっきり感じたのだ。この結びつきが怖くなったので、それを絶ち切ろうと、頭をあっちへ向けたり、こっちへ向けたりしたが、光線から逃れることはできなかった。それどころか輾転反側をくり返しているうちに、実に不思議なことを経験した。うつぶせになって顔を枕の下に埋めても、柘榴石の光が額に当っているような気がしたのだ。すると、後頭部だったところが起伏を生じ、前頭部のような形になり出すのをはっきり感じた。旋毛（つむじ）のあたりからふたつめの顔ができてきたのだ。——恐ろしいという感じはしなかった。どうあがいても光から逃れられなかったから、ただ鬱陶しかっただけだ。

ヤーヌスの頭だ、と私は呟いたが、ラテン語の授業でしぼられたときの名残りにすぎないな、と眠りながら意識していた。そう思うことで自分を納得させようとしたわけなのだが、心は少しも休まらなかった。ヤーヌスだって？——ばかな。ヤーヌスなんかじゃない！　でも、それならなんだろう？——夢現（うつつ）のまま苛々し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com